

日銀所長の あさひかわ 楽

⑩

旭川に赴任すると決ま
つて、当地の情報収集を
していた際、三浦修三
さんの出身地であることを
知りました。「氷点」や
「塩狩峠」などの作品が
浮かび、「氷点」を改めて
読んでみようと思つて文
庫本を買ってみました。
ご存知のとおり、上下巻
の二冊には、続編の上下巻
もある大作で、着任当初
は、なかなかまとまらな

私の「氷点」

時間がとれず、ルリ子が美
瑛川のはじめで殺害された
最初の五十ページあたりで
止まったままになっていま
した。
この夏に、残りを一気に
読もうと決意しました。読
み進むと、止まらせません。
何と豊かな発想力、奇想天
外な構想力を持った作家な
のでしよう。この作品は、
「人間の原罪」や「罪のゆ
るし」といった、人が生き
ていく上でも大きく重いテー
マを扱ったものでありますが、ミ
ステリー小説のように最後まで読
者を引き付け、離しません。特に、
「氷点(上下)」を読み終えたあ
と、「このままでは陽子が浮かばれ
ない。あまりにも可哀なつた」と
の思いで続編に引き込まれていっ
た人は私だけではないでしょう。

読み進みながら、「夏枝への復
讐心とはいへ、なぜ辻口院長は、
幼いルリ子を殺害した佐石の娘と
される陽子を、養女としてかくも
冷静に受け入れることができたの
か」、「なぜ高木先生は佐石の娘だ
と偽って陽子を辻口院長に差し向
けたのか」、「なぜ夏枝の性格をか
くも醜く描かねばならないのか」、
などいくつもの疑問を抱くように
なりますが、読み終わってみると、
全てが緻密かつ周到な計算に基づ
いて書かれていることがわかりま
す。

登場人物の心理状況からも窺わ
れるように、人間である以上、程
度の差こそあれ、誰もが、人間と
してどうしようもない感情とそれ
をコントロールする理性、双方を
併せ持っているわけです。実は、
経済活動の中で市場の機能にいち
早く注目し、古典派経済学の基礎
を築いたアダム・スミスも似たよ
うなことを語っています。
彼は「各々の経済主体が利己的
に利益追求行動をしても、神の見
えざる手により、適切な価格と数

量(需要と供給)が導かれる」と
唱えた経済学者としてあまりにも
有名ですが、元々はスコットラン
ドのグラスゴー大学で哲学を教え
ていました。曰く、経済活動を突
き動かしていくためには「他人よ
りも金持ちになりたい」とか「豊
かになりたい」といった人間が持
つ「弱さ(欲望や利己心)」が不可
欠であるが、それは、「賢さ(秩序
や道徳を重んじる意識)」によって
適切にコントロールされたもので
なければならぬと、二宮尊徳翁
も「道徳なき経済は罪悪なり。経
済なき道徳は虚言なり」と語って
います。サブプライム住宅ローン
問題に端を発した金融危機に至る
までのプロセスは一体何だったの
か。改めて金融経済活動の原点に
立ち戻って考えていくことの重要
性を感じざるを得ません。
さて、私にとって「氷点」、「続

尾家啓之(おひえひろゆき)
一九五八年(昭和三十三年)
東京都生まれ。八一年(同五十
六年)日本銀行に入行。米国ワ
シントンでの勤務や、橋本内
閣の行政改革会議事務局への
出向、総務人事企画役などを
経て、〇七年(平成十九年)か
ら旭川事務所長。趣味は音楽
全般。ミュージカル鑑賞。社交
ダンス。

氷点」は壮絶で激しく、心の底か
ら突き動かされた、人生の指南書
となりました。「氷点」の最後の
シーンは庄巻です(だからと言っ
て、そこだけ読まないでください。
そこに至るプロセスが凄いのです
から)。陽子の心の氷点が融ける瞬
間、いつも心から離れません。
(日本銀行旭川事務所長
※毎月第一週に掲載します)